

和服における着崩れについての考察（第2報）

羽生京子、仲村洋子

The Study on deformation of dressing in KIMONO Part 2

Kyoko HABU and Youko NAKAMURA

わが国独自の和服は、着付けることによって衣服としての機能を果たす。着装後時間を経過することによって、動きに伴い着直後と形状の変化つまり着崩れが生じる。この着崩れについて、前報に引き続いて究明したのが本研究である。

前回の実験について疑問視された、いくつかの点について解決を計るために、今回も、3タイプ、つまりS・M・Lサイズの被験者について、標準寸法と割り出し法による仕立て上がり寸法を採用した試着衣を新たに作製し、着装実験を行った。

試着衣の作製条件として、視覚的判断を考慮して実験に用いる浴衣地の図柄などを同一にすること、ある程度幅のある標準寸法を一律に定めること、一定の技術で縫製し均一に仕上げることなどについて配慮した。

着装実験によって、前回とほぼ同様な結果を得ることが出来た。つまり、S・Mサイズについては、標準寸法を統一したことで着装スタイルの変化はあっても、着崩れ量の変動は少ないし、割り出し法においてのスタイル・着崩れ量も同程度と判断できた。Lサイズに関しては標準寸法での不足が一層明瞭になり、割り出し法によっても許容範囲ではあるが充分ではない。ただし、それによる着崩れは同程度であることを確認した。加えて、Lサイズについて、課題を解決する手掛かりとして、幅の広い浴衣地を準備し布幅の関係で、試みてない割り出しで算出した数値によって試着衣を作製し再実験を試みた。結果、着装スタイルはほぼ満足出来る形となったが、接合線位置つまり各身幅の比率について新たな課題が残される結果となった。

キーワード：着崩れ、標準寸法、割り出し法、体型、試着衣

I 緒 言

和服が普段着として着用されなくなって久しい。平面的に構成された和服は身にまとい形づくってこそ初めて衣服としての機能を持つ。にも関わらず、和服を着用する機会の少ない

着馴れぬ人にとって自分で着装することは言うまでもなく、着装後もその姿・形を維持するのは結構難しいものがある。着装した直後と比較して大なり小なりスタイルの変容、いわゆる着崩れと呼ばれる変化が生じる。この着崩れに着目し、要因の一つとして着物のサイズと体格・体型の不一致を想定して究明したのが前報¹⁾である。

「平面構成学演習」の授業を履修している学生の協力を得て、標準寸法を基にして縫製したゆかたと、着用者の身体を計測して割り出した寸法によって縫製した試着衣を用いて、着心地といった被験者自身の判断と、着装直後と一定量の動作をした後を撮影した写真による客観的な観察の両面から着装実験を行った。

その結果、着心地については各自の感性に由来する面が大きいため、様々な異なる評価を得た。一方、写真による観察においては、腰囲95cm、JIS規格の13ARいわゆるMサイズまでの体格であれば、ゆかた・試着衣共に変化が認められたものの、着崩れとして扱う程度ではなく、手直しで済む範囲であった。しかし、腰囲100cmを超える肥満体については、標準寸法のゆかたを着装した場合に著しい着崩れが生じた。それにひきかえ身体に合わせた試着衣の場合は、身体を包みこめる幅が確保出来たことで、崩れ方の度合いが少なくなり、Mサイズまでの体格と同レベルの変化にとどまった。ほぼ納得できる結果を得たと言えるが、前回の実験をとおして懸念される点がいくつか考えられる。

- 1) ゆかたと試着衣では、用いた布地の違いが著しい。材質はともかく、図柄において花模様と格子縞といった極端に視覚に訴えるものが違い過ぎること。
- 2) ゆかたについては、標準寸法を基にして加減した数値で縫製されている場合もあり、当然のことながら、学生各人の出来上がり寸法が同一ではない。
- 3) 割り出し法の試着衣についても、縫製経験が浅いものがほとんどであり、技術的に未熟であるため計算された数値によって正確に縫製されているか気に掛かる点である。この点については、ゆかたにも同様なことが考えられる。

以上のようなことが問題視されるので、前報の着装実験の結果を確認する意味も含めて、今回も、前回と同じ三人の被験者を対象にして新たに試着衣を作製し、再度の着装実験を行うこととした。

Ⅱ 着装実験

1 被験者と仕立て上がり寸法

この実験の目的は、上述した問題点を解決し、結果を確認することである。従って、被験者及びデーターを同一のものとする必要がある。JIS規格により腰囲89cmまでをSサイズ、

91～95cmをMサイズ、97cm以上をL・LLサイズと分類し、その範囲に属する腰囲82.5cm、90cm、110cmの学生をそれぞれS、M、Lサイズの被験者として採用している。

身体に合わせた和服を縫製するためには、まず仕立て上がり寸法を決める必要があり、そのためには各自の体型把握が必須である。計測を行った身体の採寸部位は第1表のとおりであり、使用した割り出し法は第2表に掲げた。前報で下半身の着崩れは上半身にも影響を及ぼすことは認識したが、再確認を目的とする本実験では、身幅を中心とした下半身に焦点をあて、上半身に関わる寸法については標準寸法を今回も利用し、割り出し寸法として第2表にあわせて記載した。ちなみに袖丈、袖口、袖付、衿肩明き、繰り越し、身八つ口、衽下がり、衿幅がそれに当たる。

一方標準寸法については、前報のゆかたは複数の指導者のもとで製作されており、標準寸法の範囲内ではあるが、同一ではない。サイズの異なる被験者であるが故に、統一した寸法での比較が、着崩れをより正確に掌握できるものと考え、第2表に併記した寸法を標準寸法とした。ただし、身丈と衽下については、被験者の身長を基準とした。

2 縫製方法

解決しなければならない疑問点として、使用した布の図柄があまりにも違いすぎることを指摘した。そこで今回は、綿100%、幅38cm長さ12mの同じ浴衣地を材料として用いた。地色は紺色に統一し、標準寸法による試着衣（以下試着衣Ⅰと称する）、割り出し寸法による試着衣（以下試着衣Ⅱと称する）をそれぞれ同一の図柄とした。加えて、写真観察時の比較がより明確になる様に、裁断する過程において肩山、袖山の図柄を同位置とし、上前衽の模様配置にも配慮した。

しるしのつけ方・縫い方はこれまでと同様、永野順子著『平面構成学実習Ⅰ』²⁾の「大裁女物ひとえ長着」の項を参考にした。ただし、胸の重なりを確保するために前回と同様、衽つけ線のしるし付けを腰囲によって変化させた。胸幅と腰囲を比例させ、Sサイズは裁切り衿肩明き－1cm、つまり9cm、Mサイズは8cm、Lサイズは7cmに剣先位置を決めた。また、今回材料として使用した浴衣地の布幅は、幅の広い方である。にもかかわらず、割り出し寸法による袖幅に対し、Sサイズで1cm、Mサイズで1.1cm、Lサイズで0.8cmの不足が生じた。特別な理由がない限り和服は一反の布から作り上げる。今回は布の補足は行わず、布幅いっぱいになるように袖幅のしるし付けを行うこととしたため、当然のことながら衽寸法も第2表の記載寸法より袖幅の不足分だけ短くなる結果となった。

試着衣の縫製は演習時間内で完成させなければならず、時間の短縮を計るため、縫製上支障のない範囲で省略してきた。例えば、肩当・居敷当は付けず、衽下は耳を利用し、袖口・

第1表 採寸部位

	採寸部位		採寸部位
イ	身長	ト	腰囲
ロ	尖椎より床まで	チ	掌囲
ハ	肩中央から乳まで	リ	腕付根囲
ニ	ウエストから肩を通してウエストまで	ヌ	ウエストから床まで
ホ	尖椎よりウエストまで-2.	ル	胸囲
ヘ	首囲	ヲ	胴囲

第2表 標準寸法・割り出し法・割り出し寸法

(単位: cm)

名 称	標準寸法	割り出し法	割り出し寸法		
			S	M	L
袖丈	50.	身長×1/3	50.0	50.0	50.0
袖口	23.	掌囲×1/2+10.~12.	23.0	23.0	23.0
袖幅	33.	衿×1/2+1.内外	36.5	36.6	36.3
袖付	23.	腕付根囲×1/2+2.~4.	23.0	23.0	23.0
身丈(裁切り)	身長+3.	身長+3.	158.0	163.0	165.0
着丈		実測(尖椎より床まで)	133.0	134.0	141.0
衿肩明き(上がり)	9.	首囲×1/4	9.0	9.0	9.0
繰り越し	2.	(ニ-ホ×2)×1/3	2.0	2.0	2.0
身八つ口	15.	掌囲×1/2+2.~4.	15.0	15.0	15.0
衿	64.	着丈×1/2-2.~3.	65.0	67.5	68.8
肩幅	31.	衿-袖幅	28.5	30.9	32.5
後幅	29.	腰囲×1.5×1/2×15/35	26.5	28.9	32.5
前幅	23.	腰囲×1.5×1/2×12/35	21.2	23.1	32.5
衤幅	15.	腰囲×1.5×1/2×8/35	14.1	15.4	17.0
合づま幅	13.5	衤幅-1.5	12.6	13.9	15.5
衤下がり(肩山より)	21.	ハ-3.	21.0	21.0	21.0
衤下	身長×1/2	ヌ-18.	79.0	81.5	82.5
衤幅	5.5	規定寸法(5.5)	5.5	5.5	5.5

裾は押さえ縫いで処理し、脇縫の始末も布の向きが反対にならない程度に押さえるなど、多くの部分について省略している。しかし、衿下など耳を使用して一枚であるため、三つ折をしてくけた場合と比べると、その重さが動作後の布の変化に影響を与える可能性も否定できないし、解決すべきものの一つと判断して、すべて教科書通り、つまり標準寸法のゆかたと全く同じ縫製方法により仕立てた。なお、仕上りを一定にするため、今回は試着衣Ⅰ・試着衣Ⅱとも著者らが縫製にあたった。

3 着装方法

着装の統一を画するため、6項目の条件を決め、前回と同じく同一人によって着装させた。

- 1) 上半身の背縫は背中心に合わせる。
- 2) 上前を決める時、左前身頃の衿下を右腰骨にあてる。
- 3) 腰紐の位置は腰骨より2 cm上に締める。
- 4) 肩山を肩線より2 cm後方にきめる。
- 5) 上半身と下半身の衽つけ線を揃えるようにして、頸窩点直下に前面衿の交差位置を決める。
- 6) 身頃のゆとりは両脇に寄せる。

以上の6点に留意して着付けたが、明らかに条件に添わせる着装は不可能と判断した場合は、自然な状態で着装させた。

4 実験方法

これまで記述した方法によって縫製し、着装させた試着衣Ⅰ・Ⅱのそれぞれについて、着装直後と歩行後の着崩れを写真によって観察した。

- 1) 着装直後、前面、背面、両側面より写真撮影を行った。
- 2) 2階分の階段昇降を含む5分程度の歩行後、1)と同様に写真撮影を行った。

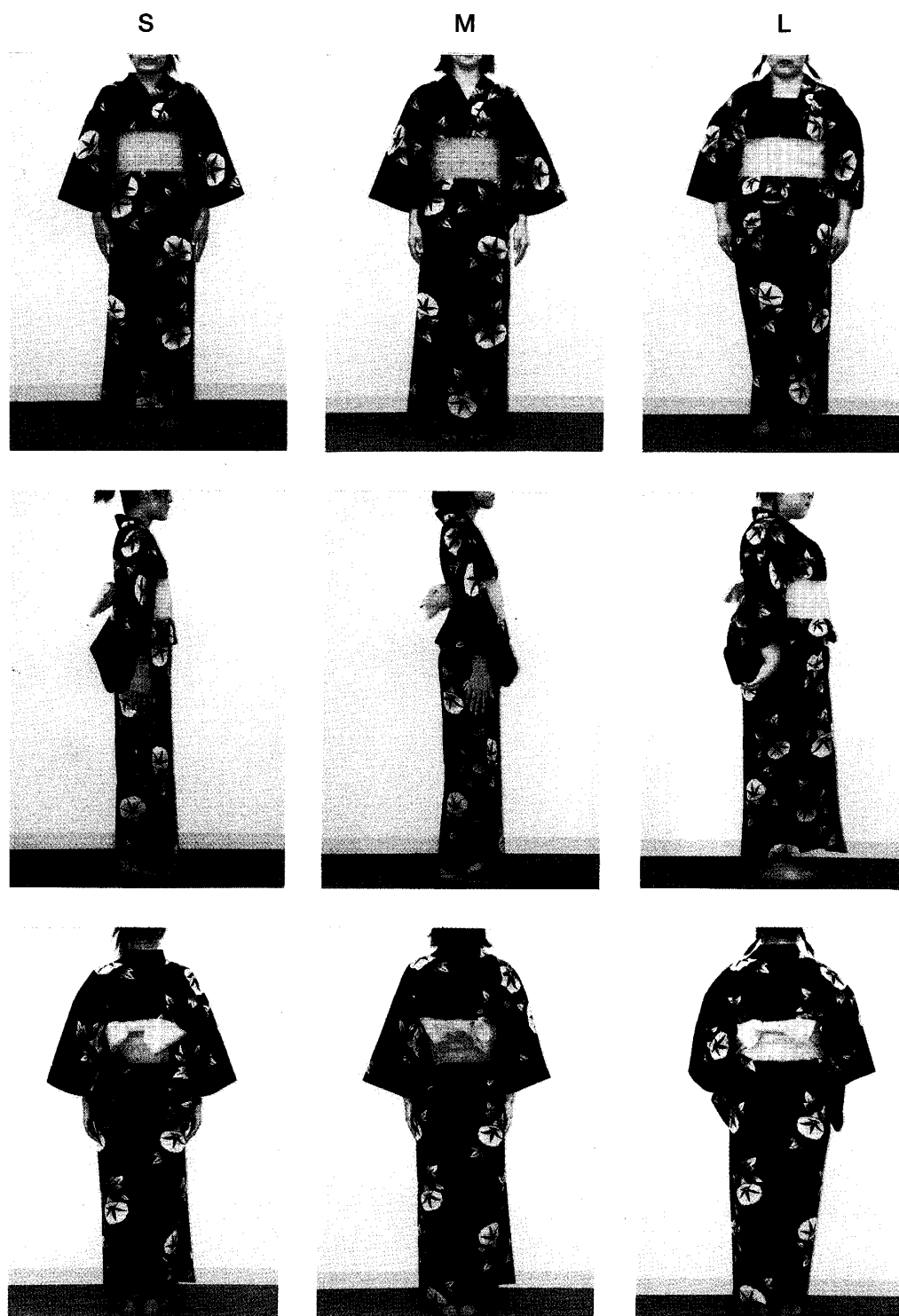
着装直後および歩行後の写真は、第1図から第4図である。

Ⅲ 実験結果および考察

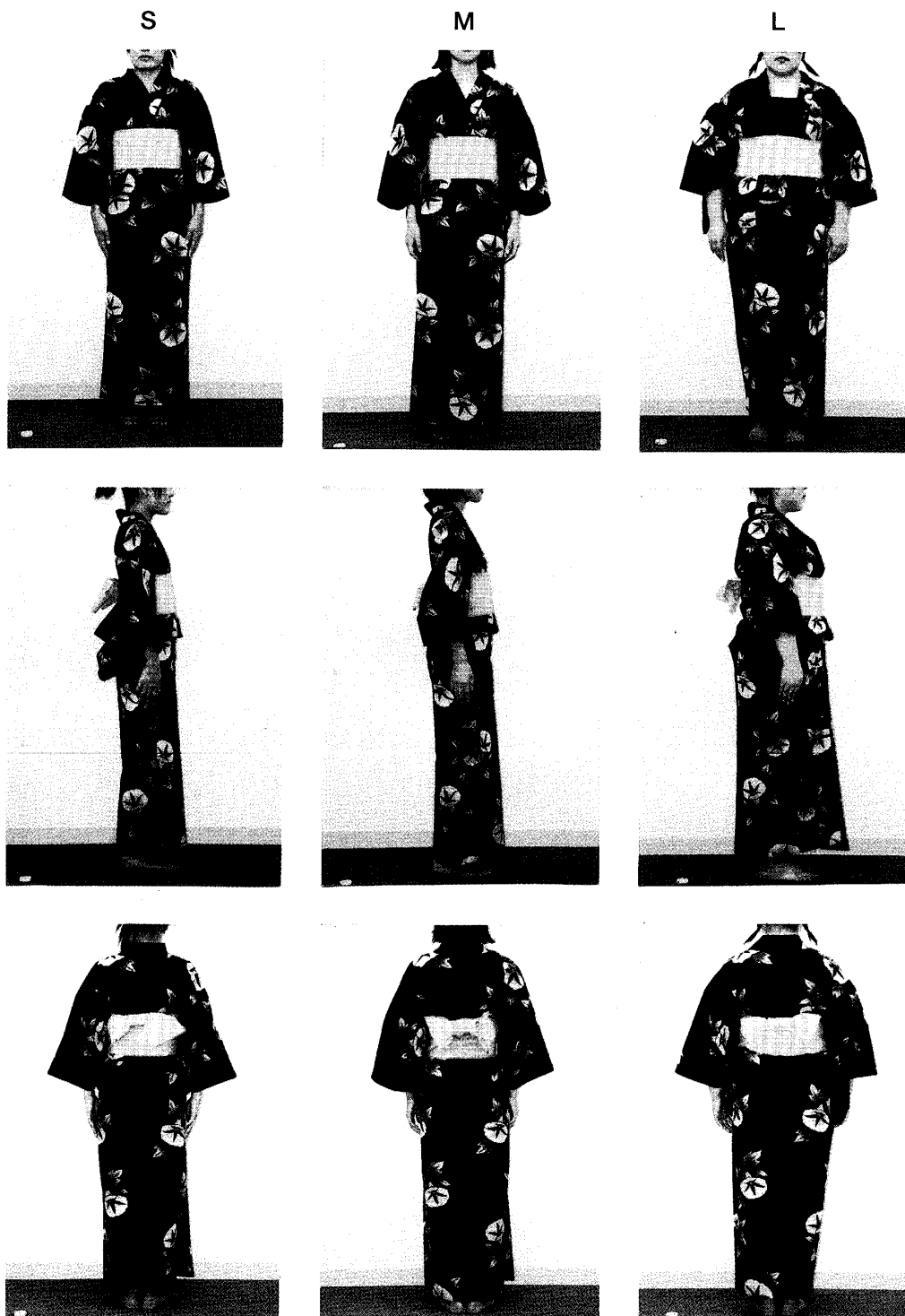
Sサイズの被験者

- 1) 試着衣Ⅰの着装状態については、瘦身体のため肩の厚みに身丈が使われないこともあって、お端折り量が多いこと、衿の交差位置がやや高めであること、下半身の背縫が右寄りであることなどから、全体的に少々たっぷり目の印象を与える。

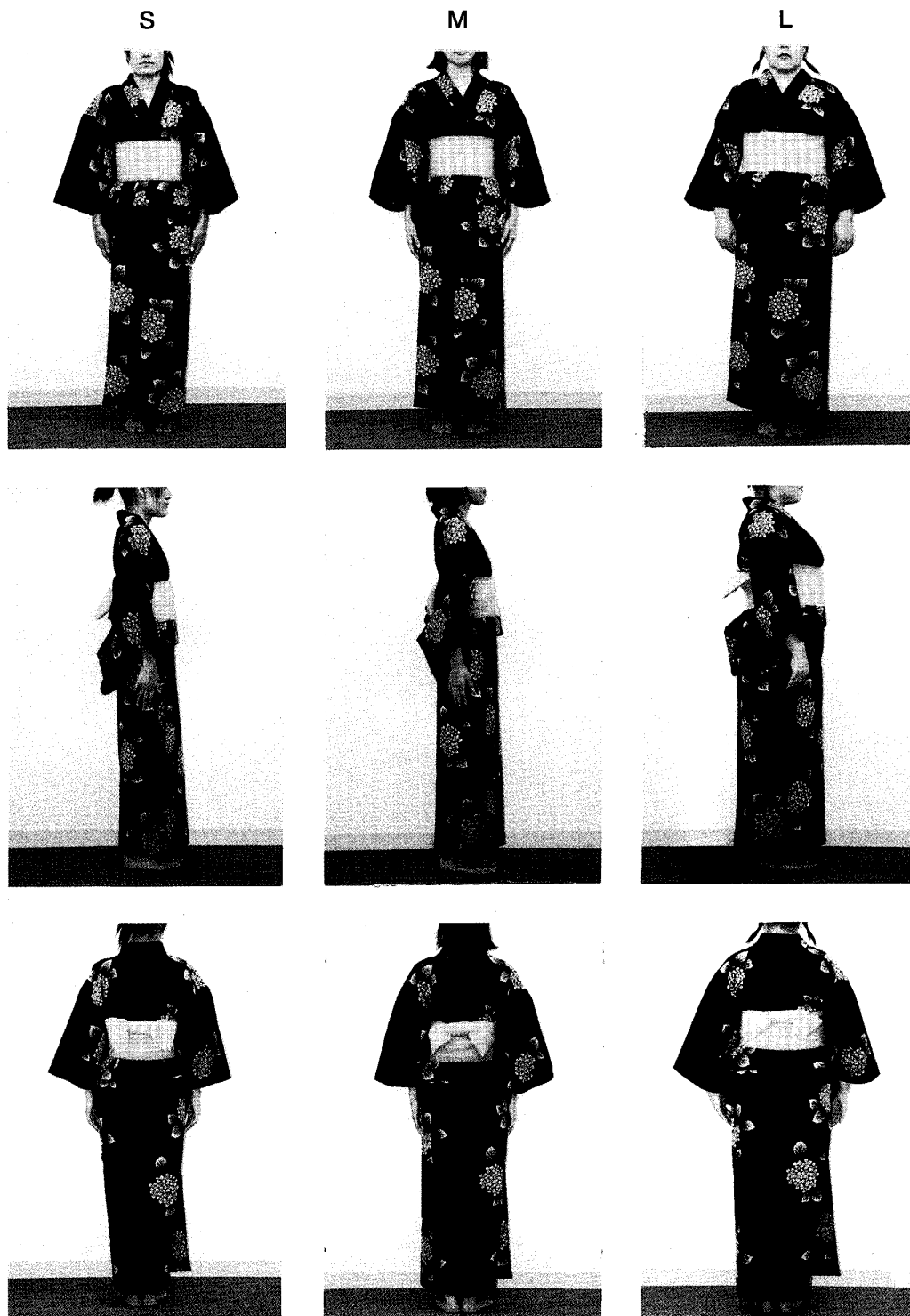
歩行後は、側面から確認できる腰から裾に至る前後の広がり、上前つま先部分の移動もわずかである。



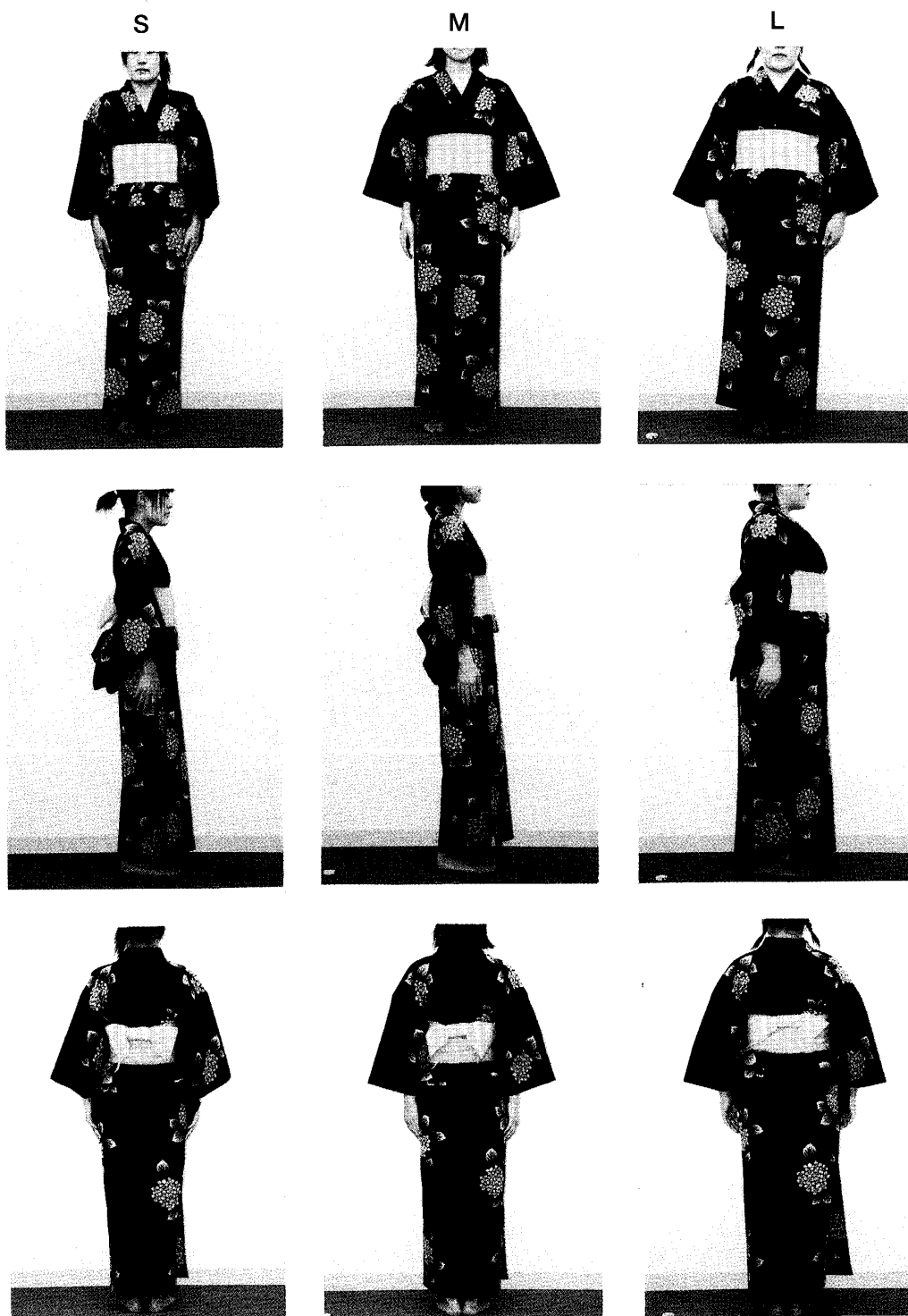
第1図 試着衣 I (着装直後)



第2図 試着衣 I（歩行後）



第3図 試着衣Ⅱ（着装直後）



第4図 試着衣Ⅱ（歩行後）

- 2) 試着衣Ⅱについては、三者の中で全面衿の交差位置が最も低い。前面から見た場合左脇に後身頃が見え、加えて背縫が左方に寄っていることなどから全体量の不足が明らかである。特に前幅の不足量が大きい。

結果として、歩行後は移動量が大きく、前後の広がり、上前衿下裾線位置が変化している。

Mサイズの被験者

- 1) 試着衣Ⅰについては、ほぼ妥当で全体にすっきりとしている。つまり、衿の交差位置、背縫の位置、お端折り量などのチェックポイントにおいて適当と判断できる状態なので身体にあっている印象を与える。ただし、衿は不足している。

歩行後の変化については、余分なゆとり量が少ないためか側面からの前後の広がり、上前のつま先部分の移動量がSサイズよりは大きい。

- 2) 試着衣Ⅱについては、着装直後・歩行後いずれも試着衣Ⅰとほとんど類似した形である。ただし、衿については試着衣Ⅰと異なり適している。

Lサイズの被験者

- 1) 試着衣Ⅰについては、上前の衿下を腰骨位置にあてるという基本着装ができず、可能な範囲での着装にしたことから解るように全体量が明らかに不足している。衿の交差が帯位置近くまで下がり、完全にはだけた状態になり、身丈が肩の厚みにとられるために、お端折り量が少ない。

歩行後は、上半身の胸元が一層はだけ、下半身は裾広がり、お端折りは特に後腰のあたりで離れて浮いて見える。

- 2) 試着衣Ⅱについては、肩の厚みで繰り越し量が規定以上になることを除いては、着装条件を満たす着装が可能になった。無理なく身体を包み込めたせいか、試着衣Ⅰと比較した時、身体が締まって見える。

歩行後は、背面から見た衿下裾位置の変化はわずかであるが、側面からは前後に開き下前脇線の移動量が多い。

以上三人の被験者について、試着衣Ⅰ・Ⅱの写真観察を行った。

まず、同一寸法で作製した試着衣Ⅰと、前報では標準寸法として扱ったゆかた（以下ゆかたと称する）の着装状態を比較して、いずれの被験者においても相違があること、その程度はそれぞれ異なることを確認した。Mサイズが、微妙な変化に止まったのに対してS・Lサイズは明らかに異なっており、特にLサイズについては、胸元の重なりかたの違いが顕著になり試着衣Ⅰの胸幅の不足が強調された。前述したように、標準寸法にも幅があり指導者の

判断に依るところもあって、体型によって多少の斟酌がされて、ゆかたの出来上がり寸法が一律では無い。つまり被験者三人の数値が微妙に異なることが解る。例えば、Lサイズの場合など体格・体型を考慮して、標準寸法の範囲内で上限の数値を採用したと推測出来る。

試着衣Ⅰの着崩れについては、仕立て上がり寸法を画一にしたために着装直後のスタイルの違いはあっても、着崩れ量そのものはゆかたと同程度である。

今回の実験によって、第一に、前報のゆかたを標準寸法として扱ったが、その範囲内で異なる数値が採用されていること、第二に、標準寸法の範囲であれば、Mサイズは当然のことながらSサイズについても許容される着装スタイルになることを確認した。言い換えれば、着装スタイルは、かくあらねばならないと固定されたものではないので、ゆったりとした着方を好むとすればSサイズでも不適切とは言いきれない。このあたりが融通性を持つ標準寸法といわれる所以と考えられる。

次に、割り出し法による試着衣Ⅱについては、製作目的が試着衣Ⅰとの比較にあり、前報の学生が縫製した割り出し法による試着衣（以下試着衣と称する）と比較するときには、やはり前回と同じく試着衣の図柄が異なるために違和感を覚えるが、着装直後、歩行後いずれも同様な状態を呈している。すなわち、Sサイズについては、標準寸法に比べて幾分全体量の不足が目立つし、Lサイズは腰囲部分がまだ充分ではないといった検討すべき課題もあるものの、いずれのサイズにおいてもほぼ着装状態が満足できると共に、着崩れについてもいささかの手直しで元の形状に戻せる程度である。同じ数値を用いて作製したのであるから当然の結果とも言えるが、縫製経験の浅いこと等から起こる不正確さを危惧し、再確認する意味もあったので、その点については学生によって一定レベルで縫製されていたことが確認出来た。

総 括

前報で検討課題とした布地に関する諸条件を一定にし、縫製の均一化をはかって、試着衣Ⅰ・Ⅱを作製し着装実験を試みたのが本報である。

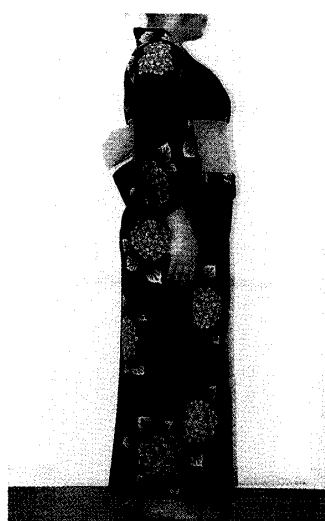
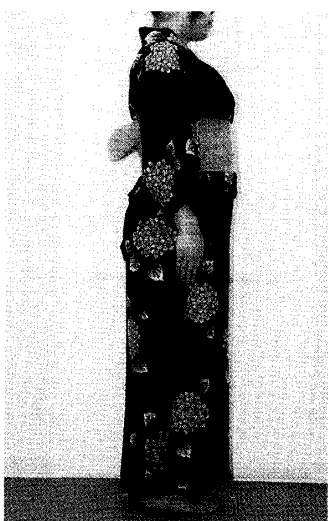
S・Mサイズについては、割り出し法を採用して寸法を算出することを否定することではないが、極論すれば標準寸法の範囲内の操作で対応しうると言えよう。

それに反して、Lサイズについては標準寸法では完全に範囲外で適応不可能となったのに対して、割り出し法は腰囲部分での不足といった課題を抱えながらも着装が可能となり、割り出し法の有効性を確認できた。着崩れ量についても、身体を包み込む身幅を確保できたので、S・Mサイズと似通った程度に止まっている。いずれは、Sサイズのみならず、それ以

装着直後



歩行後



第5図 試着衣Ⅱ

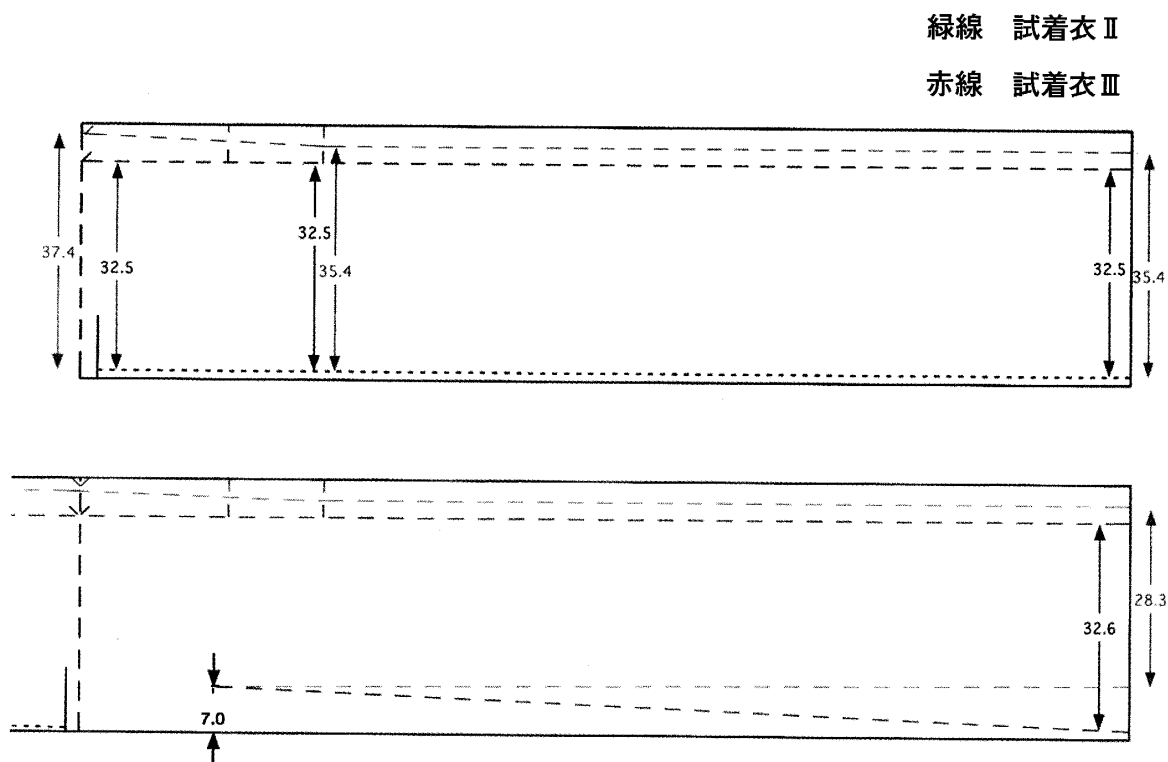
装着直後



歩行後



第6図 試着衣Ⅲ

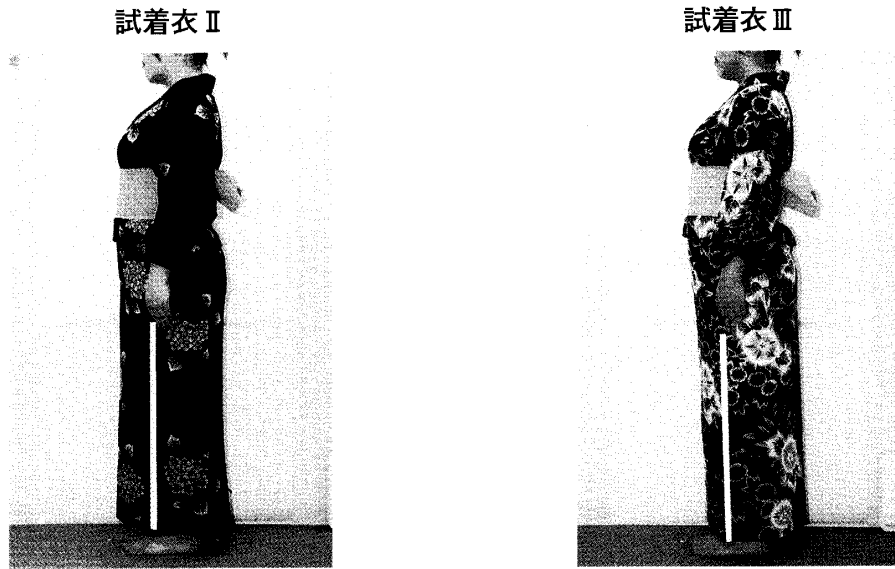


第7図 試着衣Ⅱ・Ⅲ しるしつけ図

下のサイズについても取り上げたいが、当面はLサイズに焦点を絞って、さらに検討を重ねたい。

Lサイズに関する問題点を解決する手掛かりの一つとして、布幅の関係から割り出し法の数値そのままでは縫製出来ず、身幅の合計は確保するよう調整した経過がある。そこで、クイーンサイズと呼ばれる42cm幅の反物を用い、割り出し寸法を操作すること無く算出した数値で試着衣(以下試着衣Ⅲと称する)を作製し、これまでと同様の方法により着装実験を行った。試着衣ⅡとⅢを比較するために身頃のしるしつけを重ねたのが第7図であり、着装写真が第5・6図である。

割り出したそのままの寸法では、後幅が試着衣Ⅱより2.9cm広がり、そのため前幅は狭くなる。剣先を同位置に設定すると、当然の結果として衽つけ線は通常と反対に裾より上部に向かって広がる。試着衣Ⅱより衿下位置で前身幅は1.8cm、胸幅では実に4cmも広がった。裾窄まりに着装する和服にとっては仕立てる段階から裾を狭く縫うことは、ある意味で意に合ったこととも考えられる。その影響があるのか着装直後のスタイルは、胸元での重なり具



第8図 左側面図（着装直後）

合や腰まわりのゆとり量など、Lサイズにとってほぼ納得できる形状となった。ただ、左側面の写真（第8図）によって脇線が試着衣Ⅱに比べて前寄り、横幅の4分の3程前に位置しているのが疑問視される。第8図の白線が脇線位置である。形に変化のない和服において、布の接合線は着装すればデザイン線にもなる。つまり、背縫、脇縫、衿つけ線の位置によって各部位での比率が異なり、視覚に訴えるものが違ってくる。それによって痩せてみえたり太ってみえたりといった影響がでてくることが考えられる。実際、感覚的ではあるが試着衣Ⅲの脇線も前に寄りすぎで、後腰が大きく見える。加えて、歩行後の上半身については、ほとんど変化が無かったのに対し、下半身は前後が広がり、上前衿下裾線位置の移動が激しい。合理的であると思えた身幅と蹴回しの関係においても危惧の念を抱く結果となった。

着崩れの少ない、美しく整った和服の姿・形は、割り出し法の再考なくしては考えられない。今後は、単に身体を包み込むことに止まらず、デザイン線としての接合線の有り様も含めて、標準寸法で包括出来ない体型、なかでもLサイズ以上に重点を置いて、より良い割り出し法を究明したい。それと共に、身体にあった和服は着崩れも少ないことを、多種の身体動作、つまり生活活動に必要な動作を取り入れ、且つ着装時間の延長を計ることも試み、立証していきたい。

〔付記〕

本研究を作製するにあたって、平面構成研究室の出山悦代氏、小平志乃氏のご協力を得た。

文 献

- 1) 仲村洋子・羽生京子：和洋女子大学紀要43 家政系編 37～51 (2003)
- 2) 永野順子：平面構成学実習 I 衣生活研究会 46～85 (1983)